
TODSERIES ~その後の物語~

平塚周太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

TODSERIES ～その後の物語～

【著者名】

平塚周太

【あらすじ】

神の目の争乱の終結から約三十年、語る人のいない英雄の活躍から十年人々は忘れ平和な日々を送る。

そんな平和な世界でも未だ残る文化。レンズによる文化である。

神の目の争乱の後、衰退を見せたが、よりよい生活を望む人たちやエルレインが見せた奇跡により、レンズの可能性を見直した科学者により

レンズ文化は徐々に、しかし確実に前へと進んでいった。

そして、レンズ文化の復活によりレンズの需要が高騰。
それにより、各地でレンズハンターが復活した。

そんな中、また英雄の血を引いた子達が世代を越えて出会ひ。

プロローグ（前書き）

プロローグです。
でも本編のスタートは少し先となります。

プロローグ

神の目の争乱の終結から約三十年、人々は忘れ平和な日々を送る。語る人のいない英雄の活躍から十年、存在理由を無くし守る物のないアタモニの人々は、本当の意味で宗教団になつた。

そんな平和な世界でも未だ残る文化。レンズによる文化である。神の目の争乱の後、衰退を見せたが、よりよい生活を望む人たちやエルレインが見せた奇跡により、レンズの可能性を見直した科学者により

レンズ文化は徐々に、しかし確実に前へと進んでいった。

そして、レンズ文化の復活によりレンズの需要が高騰。それにより、各地でレンズハンターが復活した。

また、古都ダリルショイドは旧ヒュー・マ邸にあつたレンズ製品や設計図などを求めて

今は古都から新都、一番賑やかな国となつている。

そして、アタモニ神団のお膝元アイグレッテは神団の科学者によりダリルショイド以上の発展を見せた。

そんな中、また英雄の血を引いた子達が世代を越えて出合つ。

TOD2 その後（前書き）

今回はTOD2メインでEDの後の話です。

TOD2 その後

「は～～」

兄が死んだ。でも無駄死にではない。敵の大将ミクトランと相打ちになつたのだ。それで十分かもしけないが今は違う。

「アイツ未来で生き返っちゃうんだからね～。」

兄の墓の前で立つていると急にめまいがして記憶が出来た。千年後の世界での仲間との旅神との戦い全てをだ。

「まつどりせ又やられるからいつか。」

しかし、私も記憶が戻つたことを仲間に伝えたい。どうするか。

「あーあつた。」

私にしか出来なくて絶対に仲間に伝える方法が。

「さつそく準備準備～～

俺とリアラがラグナ遺跡から戻るとロニーも記憶を戻していた。

そして、古都ダリルシェイドヒューゴ邸前

「しかし、本当にジユーダスの野郎いるのか？」

「絶対いる！俺には分かるんだ。きっとあそこにいるー。」

「でも正面から堂々とは入れないでしょう。どうやって行くの？」

「う・・・それは」

「じゃあ水道管から入るか。」

「えへ～また戦うの～？」

「いいだろ神にも勝つたんだからもつとしつかりしろよ。」

「そこの三人組さつきから屋敷の前で何をしていろ。」

「やべ見つかってたぞ、逃げろ。」

「え、もう見つかったの。」

「いいから早くしろリアラ！」

「で、でも・・・カイルが」

「リアラーローー助けてー」

「よし、こいつがどうなつてもいいのか？」

「・・・・・（カイルのバカ）野郎）」

牢屋に行くときのみんなの顔が怖かつたけどすぐに変わった。
扉が閉まって少ししてリアラがやローーが

「おーいジユーダスーいないのー？」

「おーいジユーダスーいるなら返事しろー。」

「何やつてんの二人とも？？」

「ジユーダスを搜してゐに決まつてゐだらう」でしょう。

「あのジユーダスがこんな所にいるわけ・」

「お前の頭はどうなつているんだ?」

「『ジユーダス』…」

TOD2 その後（後書き）

はい、ちょっとした無茶ですが今後とも何度もやると思います。
設定やキャラ崩壊が起きると思いますがどうぞよろしくお願いします。

TOD2「その後」 蘇つた人

「「「ジユーダス！……」」

「カイルはともかく何故お前達まで驚くんだ。」

「分かつていても上から人が降つて来られるのはな以外と驚くもんだぞ。」

「ねえロニー？何でジユーダスが居るのが分かったの！？」

「……本当に覚えてないか？カイル」

「うん。」

「まさかここまで馬鹿とはな。」

「カイル、思い出せ、らぐな遺跡の後俺達は捕まつてこの牢屋に入つたよな。」

「うん。」

「その牢屋に誰がいた？」

「あ！そっか！だから分かったのか、ロニッッ頭良い！」

「お前は前のままなのにこいつは何故退化している？」

「カイルだもの、しかたないじやない。」

「ふつ、そうだな、考えた僕が馬鹿だつたな。」

「そ、だぞジユーダス。カイルのことを考へても無駄骨だぞ」「みんな酷いよ。」

この後俺達はヴァザーゴを倒してアイグレットへ向かつた。
そして思いもよらぬ人と再会する。

アイグレッテの町 宿

「オジセーン。四人部屋開いてる?」
「ああ、開いてるぞ。じゃ代金は……」
「オーケー! エルライン様が帰ってきたぞ。」
「…………」
「ああ、そつか。すまんなお前さん達、少し待つてくれ。」

TOD2「その後」蘇つた人

「オイ！何でアイツまで蘇ってるんだよ！」

「分からないわ。」

「とにかく、外に出るぞ。」

町中

「貴方達に 祝福が有らんことを。」

ファアア

「おお、傷が治つていく。」

「お母さん！足が、足が動くよ。」

おおお！

「しかし、何度も同じ事やるな。」

「いいえ違うわ。今のは力じゃない唱術のみよ。」

「でも、何故蘇つたんだ？」

「きっと人を助けたいのよ本心から、自分の意志で。」

「あー見て！」

「なに！エルレインが遊んでいるだと！」

「それに……」

「ああ、笑つているな。」

「あ、コツチ見た。」

（我が妹と仲間の皆さん。私は前の様な事はしません。リアラの考えを代わりにやることにしました。だからリアラ、安心しなさい。

必ず人を自立させ、私達の必要ない世界にして見せます。あと、帰つて来る時は皆さんで神殿にいらしてください。待っていますよ。そしてエルレインはこちらに微笑んでから神殿には行つていった

「い、今のは」

「なんか、変わったね」

「ええ。良かったわ。本当に。」

そして俺達の一田田は幕を閉じた。

アイグレッテ港

「く～久しぶりに来ると風が気持ち良い～」

TOD2「その後」今の再会

結局あの商人に同じ事をしてからチエリク行きの船に乗った。

「次はナナリーか～。」

「どうしたの？ロニ。元気ないけど。」

「いや～、アイツに記憶が戻ついたら凶暴な性格なままなんだよな～と思うと……」

「ふつ、本当は違う癖に。それに十年後の姿じゃないんだから力負けはしないだろうが。」

「なっ、お前…覚えてたのか…？」

スタスタスタ（ジュー・ダス退場）

「えつ！ロニ、何の話？」

「いや、お前には関係ないよ。（アイツ、嫌がらせの為だけに来やがつたな）そう言えばリアラはどうしたんだよ。」

「ああ、リアラはならあそこだよ。」

「ああ、またか。」

チエリク船着き場

「何やつてんのかしらあの子。」

「あの子ね、朝から船が来る度起きては一日乗客を見たらすぐ寝ちゃうのよ。」

「あそこで一日中根転がってるなんて、なにがあるのかね～」

聞こえてくる会話は私には無駄な会話。でもまあ。

「記憶が戻つて一日田は早すぎるかな？」

記憶が戻つた日は一日中待ち遠しくて恥ずかしくて壊れそうだった

けどね。

「早く来ないかな、みんな。
旅の準備は済んでいる。」

船の上

「「フェクション！」」

TOD2～その後～ 閑話－一度目の復活（前書き）

本編にすら入っていないのに閑話なんて入れてしまいました。
でも！ここは書きたかったの！

TOD2～その後～ 開話－一度目の復活

チュンチュン

……音が聞こえる。確かあそこは海に沈んだはずだ。それなのに鳥の鳴き声が聞こえる。

(坊ちゃん！ やつと気が付きましたか！？)

「…………」

(どうしました坊ちゃん？)

「いや……確かに僕達は海に沈んだ筈だったが……」

(僕も最初は驚きました。)

「たが……何故助かったんだ？」

(さあ、そればっかりは僕にも……)

「シャル、お前は何時気が付いた？」

(坊ちゃんが起きる……五分まえぐらいですかね？)

「そうか……シャル、レンズ反応は近くに有るか？」

(少し待ってください……えっと町クラスのは北東に一つですかね)

「よし、行つてみるか。」

(でも、顔隠さなくて大丈夫ですか？)
「髪型を変えれば大丈夫だろう。」

とある街
「……」

神殿前の街だつたのか！

「だが、おかげでダリルシェイド間での道が分かつたな。」

（えつ、街に入らないんですか！？）

「元客員剣士だぞ、神殿なんか行つたらすぐに顔がバレだろ。」

（あ！…… そうでした。）

「おまえ…… 忘れてたな。」

（…………すいませんでした。）

「よし、じゃあ行くか」

（ハイ！）

そして、あの後何が有つたか全てを知つた。

TOD2～その後～ 閑話－一度目の復活（後書き）

この後ヒューロン邸の地下で隠れていたら記憶が戻ります。仮面は地下倉庫で拝借したんだと思います。

TOD2「その後」 5人目

「おーやつと見えてきたな。」

「何だか久しぶりだね。」

「そうか？」

「ええ、私とカイルは十年後の世界で来ているもの。」

「そうか、あの時か」

「お前らぼさつとするな、すぐ付くぞ。」

港

また船が来たのかな？さて、起きるか。
しかし何だね～さすがにまだ来ないかね。

「お～いみんな～待つてよ～」

!!!!

この声は！

「つたくカイル、お前いつもは先にいるのに遅れるなんて。」

「ごめ～ん

やつぱり！そうと決まれば！

「エイジ～」

ドスツ～！

「うわ～！」

「――――――！」

「みんな～！」

「――ナナリー～！」

「テメエ～！いきなり人の背中に飛びつく奴がいるか～？」

「つるさいね～本当なら襲いたい所だけど体が小さくて背中に飛び乗っちゃったんだよ。」

「そろいえばナナリー、縮んだ？」

「……カイル、お前は本当にバカだな。ナナリーは十年後の人だぞ今はまだ子供だ。」

「あつ、そうか！」

「いいじゃない、ナナリーは記憶が戻ってるし。」

「なにが良いんだよこの暴力女の」

「ロニー、何だつてえ？」

「いや、ナナリーさんの記憶が戻つて何よりで「背中に乗つってても首は絞められるんだよ。」

この後ロニーの悲鳴が響き渡った

TOD2／その後／5人目（後書き）

補足

！の三人はジユーダスカイルリアラでナナリー！の三人はカイルロニアラです
お気に入り登録ありがとうございます！

TOD2～その後～ 変わる未来

あの後、ロニーとナナリーがじゅれてから宿へと向かった。

だが、五人部屋が無く三人部屋も空いてなかつたので二・一・一・一となり、カイル・ロニーとリアラ・ナナリー最後はジュー・ダスという部屋割りになつた。

「しかし、今日は楽しかつたな～」

「どこがだ！ 全くあいつとはまだ会わないと思つてたらいきなりくるし……」

「ロニー。」

「あ、何だ？」

「嬉しそうだね。」

「なつ、どこが」

「ナナリーと会つてから前より元気になつたよ（ニタ～）」

「なつ、ち、畜生！ 覚えてろよ～」

そこには赤面しながら布団に顔を埋める馬鹿が一人。

女子部屋

「…………（／＼＼＼）」

部屋が隣だということに向ひは氣付いていないらしく。

「よかつたわね、ナナリー。」

「べ、別に、あたしは、そんな

「分かつたから早く寝ましよう。」

「くつ、年下がこんなに辛いとは思つても居なかつたよ。」

「~~~~~」

「は～やつぱり朝に弱いんだな～いつけ。」

「分かり切っていた筈なのに、つかつだつたな。」

「ねえ、みんな。試したい事が有るからちょっと出てて。」

「わかつた。」

部屋を出て少ししてリアラが半泣きなつて出てきた。
この後たつぱり三十分間粘つて起きた

TOD2～その後～ 変わる未来（後書き）

ちなみに、リアラの作戦はハイテルベルグと同じです。

TOD2／その後／今の問題

朝

「で、これからどうするんだ？」

「確かに、問題だな。」

「えつ！何が？」

「ハロルドはいつの時代の人か考えればわかるだろ？」「えつと、確かに千年前のつて、無理じゃん！」

「今気付くかね。」

「どうするんだよ！」

「それを今から考えるのよ。」

一時間後

「よし！行こうハイデルベルグへ！」

「正しくはウツドロウさんに会いに行きにだけどな。」

「そうと決まれば出発だよ！」

「……」

「どうしたの？ジュー・ダス？」

「いや、何でもない。」

「みんな、早く行こう！」

「ふー。（地上軍拠点までいって無駄足で無ければ良いが。）」

とにかく、スノーフリア行きの便を買つたが。

「次の便是五時間後です。」

「

と言われた。

「どうする？」

「どうするか、カイル。」

「うーん。」

するとリアラが小声で

「ねえ、カイル。あの時の続きしない？」

「あの時？」

「ハイデルベルグの後よ。」

「（ボン！）……」

「カイル！どうしたの！？」

「だだだだ、大丈夫だよ、リアラ。」

「どうしたーカイル。」

「ななな何でもないよ、口二」

「本当か？」

「うん！」

「カイル、返事は？」

「うん！」

「やつた！行きましょカイル！」

TOD2 ～その後～ 悪魔の暗礁（前書き）

すいません！！！TOD2やり直していたら商人はアイグレット港
じゃなくてノイシユタツトです！！
ファンの皆さんすいません！！
この様なご指摘がありましたらぜひ感想などをお願いします！

TOD2 ～その後～ 悪魔の暗礁

スノーフリア行きの船

「はー会えるかな?」

「大丈夫よ、ハロルドだもの」

「そうだな、あいつならどうにかして何かを残してるだろ?」

「あれ? ロニー? ナナリーは?」

「疲れて寝ちまつたよ。全く心は大人だけど体や体力は子供のに慣れやがつて。」

「ハハハ、大変だね」

「全く暢気だなお前等は、これから“デビルズリーフ”だと言つのに。」

「あ! ! ! ! !」

「どうしよう! ! !

「とりあえず避難だ! 乗客の人たちも! 」

「ええい! 黙れ! 今のところ大丈夫だ! 」

「で、でも。」

「いまはジユーダスを信じましょ! 」

「だが、遅かつたかもな。」

横を指すジユーダスすると
ザザザザザー!

「んな! ! !

「なぜ今回はなぜ正面から来ないんだ?」

「そんなこと言つている場合か! やるぞ! 」

正体が現れ、そこには触手が来るはずだった。
だが、来たのは。

「なんだこりやー! ! !」

そこには

(坊ちゃん！これは！)

「ああ、間違いないだろう。」

そこにいるのは“海竜ベルナルド”だった。

(もしかして僕に反応したのかな？)

「違うだろ、前は無かつたからな。」

(じゃあどうして。)

「さあ、分からぬが一つ今思い浮かんだ。」

TOD2 ～その後～ 悪魔の暗礁（後書き）

イエイ！復活のベルナルド！
詳細は次回にて。

感想、評価？指摘、送ってくれるの待つてまーす。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2369z/>

TODSERIES ~その後の物語~

2011年12月16日23時47分発行